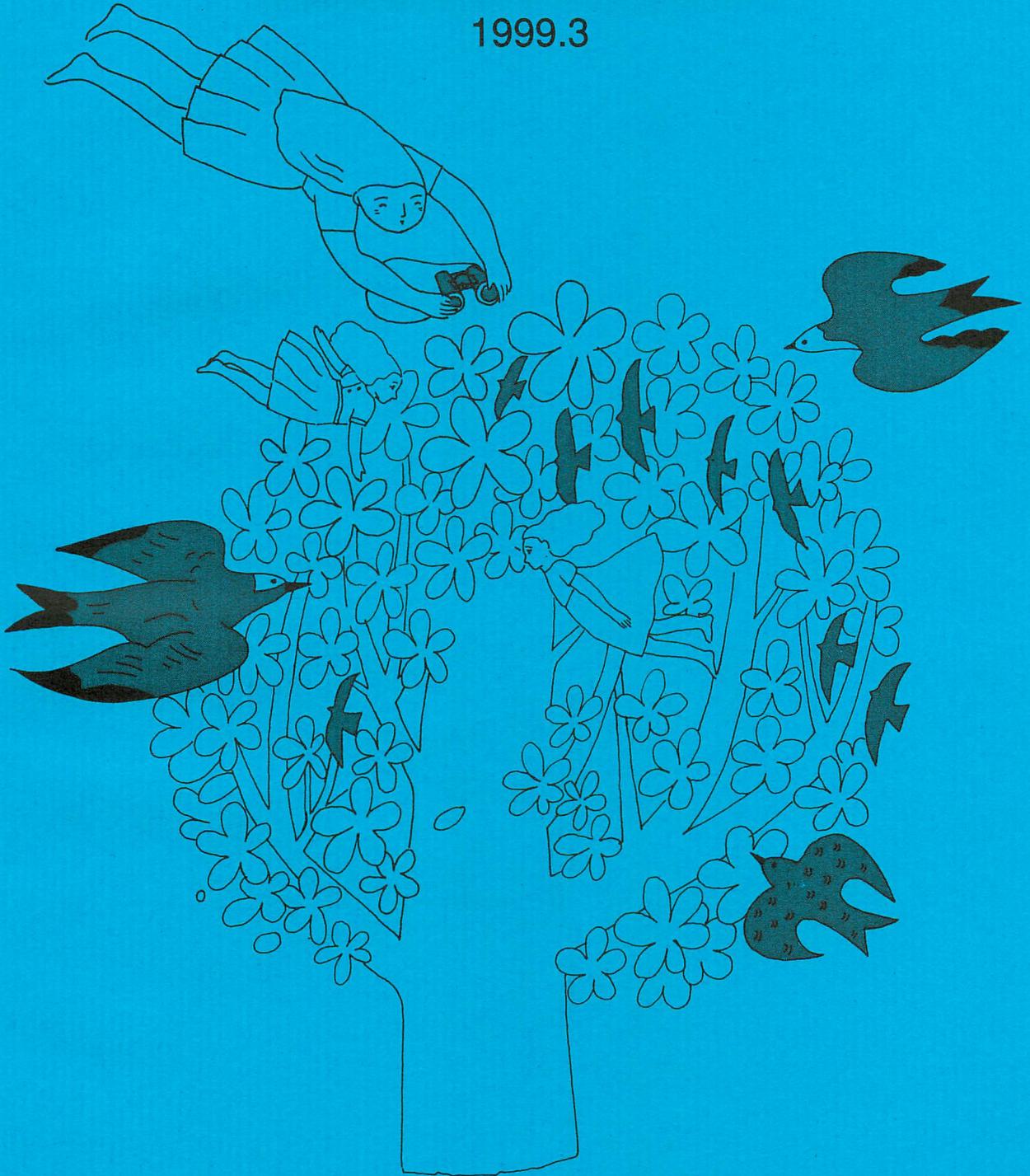


56号

愛鳥教育

1999.3



全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育 No.56 1999.3

目 次

巻頭言

本年度実績発表大会から ----- 江袋島吉 3

平成10年度講演会報告

バードウォッチングに関する

画期的な問題提起 ----- 箕輪多津男 4

講演

主観と客観の

バードウォッチング ----- 松田道生 5

後援行事報告

多摩川、野川での

トラストバードウォッチング - 箕輪多津男 11

冬期研修会案内 ----- 13

もりまき通信(6)

同じ名を持つ生き物たち ----- 森 真希 14

環境学習教材

「やちょうぬりえ」のご案内 ---- 小野紀之 16

論説

給餌活動と愛鳥教育 ----- 平田寛重 18

編集後記 ----- 19

愛鳥クイズ ----- 平田寛重 20

巻頭言

本年度実績発表大会から

会長 江袋 島 吉

◆ 第33回実績発表大会概観

平成10年度(1998)の“第33回全国野生生物保護実績発表大会”は、11月30日(月)に、環境庁で開催された。大会には10月の第1次選考(書類審査)を経た10組の団体(小6、小中1、中1、高1、一般1)が参加をした。

第1次選考には25組(小19、小中1、中2、高1、一般2)が参加をし、低調だった昨年度に比べると、若干の増加を見せている。

本来実績発表大会は、昭和38年(1963)の“鳥獣保護法”(鳥獣法)の改正に伴い、各都道府県が義務づけをされている“愛鳥モデル校”の教育振興の一助として、昭和41年(1966)から“鳥獣保護実績発表全国大会”として創設されたもので、当初の参加者はほとんどが愛鳥教育推進校であった。それが昭和61年(1986)に、環境庁の組織改編で、従来の鳥獣保護課が野生生物課と変更になったのを機に、大会名も“全国野生生物保護実績発表大会”と改称され(平成3年/1991)、それにつれて、大会の内容も様変りをするようになり、昆虫や魚類、甲殻類、その他を取り上げるケースが多くなってきた。

一方、野鳥の場合でも、総合的な取扱いから単一の種類への移行ぶりが目につくようになり、特に本年度はその傾向が強いような感じがした。

これを前者について言えば、アカウミガメ、オサガニ、ダルマガエル、ムサシトミヨ等であり、後者にはブッポウソウ、サンコウチョウ、クマガラ、ナベヅル、フクロウ等が見られる。大会出場の10団体について見ると、前者が5、後者が4、その他(事故防止関係)が1となっていて、時の移り変りを感じさせるものがあった。

従って、従来の大会のように、身近な野鳥を中心とした愛鳥活動の交歓には、ほほえましさを感じたものであるが、今回のように多種多様な発表の姿に接すると、索漠とした印象が強く、保護活動のあり方、限度等について深く考えさせられた。

その理由は、活動そのものが児童・生徒の創意から生み出されたものが少なく、長年その地域で、その土地に住む人々の伝承して来たことを、その手

法・しきたりに応じて実践をしている例が多く、新たな発意や創造という面での印象が希薄で、見様見まねの習慣化という感じがしてならない。

そして、単一種目の多くの場合は、その地域におけるトピックとしての話題性に関心が集まり、審査についても、このような特殊性に左右される傾向があり、本大会における上位半数の入賞者のすべてが、この範ちゅうに属するものであることは、特筆される事項である。

翻って、一般的な愛鳥活動を発表した学校が下位入賞に終わったことは、たまたま評価に値する内容を備えていない場合が多く、インパクトに欠ける点がマイナスになっているようである。

全般に、(1)見る～親しむ (2)調べる～知る (3)広める～守る、以上の段階を踏んだ指導の進め方は、一応の成果は挙げているものの、その学校の独自性、個々の活動の特色等の打ち出し方に一考を加えることが必要であろう。

以上、本次発表会における特異点の概略について述べたが、意のあるところを十分にお汲み取りの上、今後の実践に役立てていただけたらと望む次第である。

◆ 閑話休題

昨秋少量の血痰を見て、肺ガンの予感に若干あわてたが、高齢者のガンは進行が遅いなどと手前勝手な理屈をつけ、年度末・年度始めの雑務を整理して5月下旬に入院をする。

最初の3週間は内科で、最新式の機器による諸検査を受け、その結果手術と決まり外科に移る。2日後、5時間に及ぶ右肺中葉切除の手術を受けたが、幸い新薬の効果で、手術後も含めて全然痛みを感じることなく、5週間で無事退院をする。

病気の間は、各方面に多大の失礼やご迷惑をおかけしましたが、特にご逝去された柳澤信雄、西村健一両理事、ご退任された創立以来の功労者である梅本 登常務理事に対しては、会誌No55の巻頭言に代え、改めて感謝を申し上げ、それぞれの方々のご冥福、ご健勝をお祈りしたいと存じます。長年のご尽力有難うございました。

平成10年度講演会報告

バードウォッチングに関する画期的な問題提起

事務局 箕輪 多津男

去る平成10年11月13日（金）、東京都生涯学習センター・セミナー室において、全国愛鳥教育研究会主催の講演会を開催しました。

参加者は総勢25名で、今回は一般公募を行った関係で、大半は当研究会の存在を初めて知ったというような方々に占められました。



当日は、スケジュール通り、江袋島吉会長の挨拶、平田寛重常務理事による全国愛鳥教育研究会の活動紹介の後、(財)日本野鳥の会の嘱託専門員で、当研究会の顧問も務めていただいている松田道生氏の講演に移りました。

内容の詳細については、本誌に掲載されている松田氏ご自身の手になる『主観と客観のバードウォッチング』をご覧くださいと分かりますが、講演の際には参加者との交流も含めた主観と客観の意識に関する質問と注意の喚起、あるいは、江戸時代の浮世絵や文献、戦前に発行された図鑑など貴重な資料の提示もしていただき、参加者一人一人が、その度に目を輝かせながら聞き入っている姿が印象的でした。

『主観と客観のバードウォッチング』というタイトルから、当初はどのような内容になるのか、予想もつかなかった参加者もかなりいたようですが、「趣味」と「科学」、「欧米の自然観」と「日本の自然観」等の対比や、そのバックボーンとしての歴史的経過を辿りながらの論述は、誰にもわかりやすく、説得力を持ち、何よりこれまでにない画期的な問題提起として、今後のバードウォッチングのあり方（展開）に大きな一石を投じるものとなったことは間違いないように思われます。また、講演の端々に、松田氏の永年の経験から来る確かな実力と、感性のきらめきを感じ取った方も多かったはずで

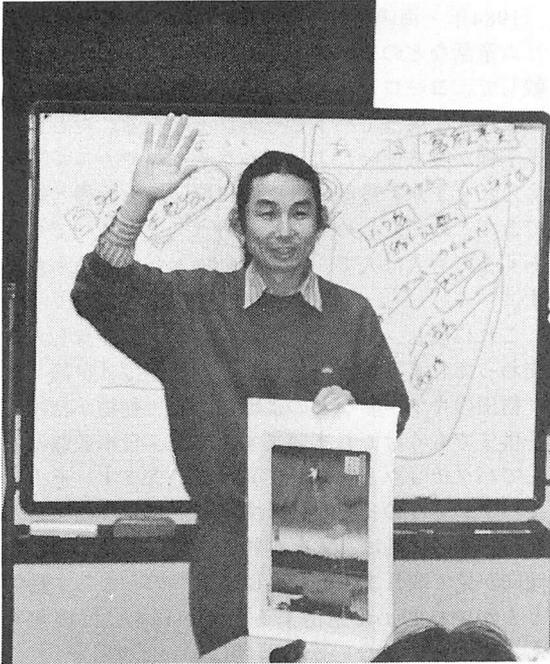
読者の皆さんも、ここでぜひ一度、自らのバードウォッチングについて見つめなおしてみたいはいかがでしょうか。

終りに、今回の講演会の開催にあたり、ご協力いただきました多くの方々に、改めて厚くお礼申し上げます。

講演

主観と客観のバードウォッチング

全国愛鳥教育研究会顧問 松田道生



バードウォッチングとは？

私たちが、こんなにのめり込んで楽しんでいるバードウォッチングの定義とは、いったいなんでしょう。定義らしいものを探してみますと、たとえば「野外で野鳥を見たり聞いたりして楽しむ趣味」と言う程度の解説はあります。しかし「野外」という言葉にこだわりますと、コタツに入って庭に来る小鳥を見ることや秋の昼下がり紅茶を飲みながらお気に入りの野鳥の写真集を見るという楽しみがバードウォッチングではないことになってしまいます。また、野鳥のみならず鳥の足跡や食べ跡、あるいは環境から彼らの生活を想像する楽しみもバードウォッチングなものですから、これも定義からはずれてしまいます。この言葉だけでは、奥深いバードウォッチングを包括しているとは言えないというのが実感です。

私の好きな言葉は、アメリカの有名なジェームス・フィッシャーによるもので「バードウォッチングは、ある者にとっては科学であったり、芸術であったり、気晴らしであったり、仕事であったり、

あるいは退屈なことである」というもの。これは、バードウォッチングの本質を言い当てた名言でしょう。

私のバードウォッチングの定義は「野鳥を楽しむすべて。ただし食べることと飼うことをのぞく」かなと思っています。しかし、バードウォッチャーを見てみると、バードウォッチングで苦しんでいる人もいますので、時々悩む定義です。最近は気楽に「楽しくなくてはバードウォッチングではない。」と思い、私の仕事や活動の根拠にしていますが、これはあくまでも私の定義、一般的な定義とは言い難いのです。そこで、バードウォッチングとは何か、今までと違った視点から考察してみたいと思います。

バードウォッチングは科学か、趣味か

バードウォッチングは鳥類学に基づいた科学という側面があります。まず、科学について論議を行ってみたいと思います。

科学とは何かというと「事実の証明」ということがいえます。科学的な事実とは「客観的に見ること」といえるでしょう。また科学的に証明するとは「追試できる、再現できる」ということになります。これに加え体系的であることなどが上げられます。体系的とは、その科学が取り扱う範囲とコンセプトを明確にすることです。たとえば鳥類学ならば、鳥類とは何で、それをどう扱うかと定義することから始まるわけです。

では、「客観的に見ること」とはどういうことか。この言葉を言い換えれば「誰が見ても同様に認識できること」になります。たとえば、鳥の数を数え表現するのに「たくさん」と言うのではなく「100羽」と数量化して表現することになります。数量化することによって誰が聞いても「100羽」というボリュームを認識できます。しかし、「たくさん」という表現では人によって捉え方が違ってきてしまいます。客観的な表現方法のひとつが数字で表すということです。さらに、「客観的に見る」とは「個人の感情を入れないこと」になります。たとえ

ば、キビタキは「きれいな鳥」と表現するのではなく「頭から翼が黒く、眉、喉から腹、腰が黄色、翼に白い白斑がある鳥」と、“きれい”とか“美しい”という個人の感情による曖昧な表現ではなく、具体的に見たままを表現すると言うことになります。

「追試できる」とは、言葉を代えれば「再現し確認することができる」と言えます。たとえば、ハシブトオオヨシキリでもハリモモチウシャクシギでも見つけたら、誰が見てもそこにいと証明することができなくてはなりません。これは、捕らえて剥製にする、写真に撮る、鳥によっては声を録音する、などの物的証拠をもって証明することです。

つぎに、バードウォッチングは趣味であるという側面を持っています。この趣味を説明するのは、科学を説明することよりも難しいことです。おそらく「楽しみ」「喜び」「好き」「面白い」というキーワードに「余暇」や「余裕」といった言葉をつなげて、定義を作り上げることになると思います。並べた言葉の「楽しみ」など前列のキーワードは、いずれも個人が感じるもので、他人にはわからない、主観的な感情であることがおわかりいただけると思います。

科学的とは客観的、趣味は主観的ということで、バードウォッチングについて検討していきたいと思っています。

欧米と日本の自然の捉え方の違い

ここで趣をかえて、日本人と欧米人と自然の捉え方の違いを比較してみることを試みます。

たとえば日本の庭造りと欧米の庭園をイメージしてください。日本の庭の究極は「枯山水」の再現であり、本来の自然をいかに作るかということに腐心してきました。名園と言える庭園は、たとえば水前寺公園は東海道の再現であり、私の家の近くの六義園は紀ノ川を模した造りになっています。そこには、自然のような山並み、なだらかな曲線にめぐられた池など、人工的な直線を排除した庭園造りがされています。自然のもつ“ゆらぎ”、フリクタル構造を巧みにとらえ取り入れることが得意なのです。

それに対し、欧米の庭園は直線や幾何学的な線によって作られ、人が手が作ったことを主張するような造りになっています。

さらに、日本人は庭から縁側、そして畳があって、床の間があり、この床の間には自然の野原の再

現である花が活けてあります。そして、人はこの間の畳の間にいるわけで、自然の中に人を置くことになります。塀をめぐらし、レンガによって外界と遮断された中で生活する欧米の家の造りとの違いがあるのではないのでしょうか。

中村禎里著「日本人の動物観—変身譚の歴史」（1984年・海鳴社）があります。この著者は、グリム童話などのヨーロッパの民話と日本の民話を比較して、ヨーロッパのものは人が動物に変身させられ後に人に戻ってハッピーエンドとなる。たとえば王子様が魔法使いによってハクチョウやカエルに変えられますが、最後には人間に戻ってお姫様と結婚できて、めでたしめでたしというストーリーです。あくまでも人は人で、動物は動物として物語られます。

これに反し、日本の民話は動物が人に変身し人と交わってしまう話があります。たとえば「夕鶴」や「信田のキツネ」などのように、人と動物が結婚し子供までもうけてしまいます。また、日本武尊は死んでハクチョウとなり天に昇っていきます。そのままハクチョウのままなのです。ヨーロッパの民話に対し日本の民話は、人と動物との境が明確ではない傾向が見て取れます。これは、自然のみならず動物と人がいっしょに生活する風土が日本には根強くあったからではないかと著者はいいます。

日本の自然とのつき合い方の歴史

このような日本人と自然とのつき合い方は、古くは「万葉集」による自然観までさかのぼることができるでしょう。中国や韓国の文化の影響を受けつつも、西行あたりからいわれる「花鳥風月」という概念がその後の日本人の自然観を形作り、「侘び、寂び」といった日本人独特の美学へと昇華していったと言えるでしょう。

また江戸時代には「遊山」がさかんに行われました。花見、紅葉狩り、雪見、潮干狩りなどは今でも残っている自然を楽しむ風習ですが、ハス、ネムなどの花見の他、冬の海でチドリを聞く、夏の湿地でヒクイナを聞く、早春のウグイスや初夏のホトトギスの初音を聞く、そして冬には枯れ野を歩くという風流を楽しむイベントがたくさんあったのです。

これらは封建政権下の大衆のエネルギーの発散という見方もできますが、多くが古来の歌人を偲んだりしながら自然に接することが目的であり、やはり

日本人の自然観の発露のひとつであったといえるでしょう。

奥田夏子、他著「野鳥と文学」（1982年・大修館書店）では、欧米と日本の詩歌の比較がなされています。感じるのは、欧米の詩ではその対象となるものの賛美を美しい言葉で飾っています。ヒバリを題材にすれば、ヒバリの素晴らしさを歌い上げます。これに対し「万葉集」の和歌を見ますと、渡り鳥を見て故郷にいる妻を思ったり、散る花を見て世のはかなさを感じたり、あくまでも自分の感情を表現するために、生き物や事象を題材としているものが多い傾向があります。

このように自然と対峙したとき、日本人は自分の感情を表現することが得意だったのです。

このような比較は、絵画でも見られます。印象派以前の欧米の絵画は、写実が真骨頂です。肖像画ならば、産毛1本1本まで表現することがよい絵の基準のひとつでありました。それに対し、日本の絵画は作者が感じたものをどう表現するかにかかっています。たとえば、尾形光琳の「紅梅白梅図」の流れの表現は実際の水の流れとはまったく異なりますが、作者にはそう見えたのでしょう。そのためか、今見ても新しさを感じるのは私だけでしょうか。また、写楽の役者の浮世絵は、おそらく写楽が感じ取ったものをうまく表現したことによって今でもなお残る傑作となっています。

それだけに海を渡った浮世絵は、ゴッホやセザンヌなどの印象派の画家たちに強い影響を与え、その後の欧米の芸術を変えるまでの強いインパクトを与えたのです。

元来は、欧米の芸術は写実、日本はデフォルメが得意。これを別の見方をしますと、欧米では客観的なものの見方をする科学が発達し、絵画の中には博物画が多く描かれました。それに対し、日本では主観的にとらえ表現する芸術、そして特有の文化が形成されたと言えるでしょう。そのため、日本における博物画は花鳥画に比べればほんの僅かしか書かれることはなく、自然科学の発達も欧米に比べて遅れをとったこととなります。

日本の鳥学の流れ

このような流れの中で日本の自然科学の歴史の流れを変えたのが、江戸後期日本にやってきたシーボルトでしょう。オランダから医者として派遣されたシーボルトは、日本の動植物、鉱物、そして食器か

ら民芸品まで蒐集し分類、整理し報告しました。中には、禁制品の日本地図まで持ちだそうとして事件となったほどです。

しかし、日本人に科学的なものの見方を教えた功績は大きなものがあります。この流れが、明治維新以後の日本の科学、自然科学へ与えた影響ははかりられません。

たとえば黒田斎清（なりきよ）は、シーボルトを訪ね会見しています。黒田斎清はいわずと知れた現・日本野鳥の会会長の黒田長久博士の6代前にあたり黒田家が日本の鳥類学を担ってきたきかけを与えています。さらに、シーボルトの日本の鳥類学への貢献は、1845-1850年（弘化2年～嘉永3年）の“Fauna Japonica”の発行です。これには、オランダのテンミンク、シュレーゲルの両氏が編纂したものです。いわば、この「鳥類の部」が日本の鳥の分類の基礎となりました。この他、パラス、ステラー、スウィーホーが江戸時代、明治時代には、ブラキストン、プライヤ、シーボーム、スタイナーなどの学者が、日本の鳥類を報告しています。

そして初代、日本人の鳥類学者と言えるのは、飯島魁（いさお）博士。当時の東京帝国大学の動物学教室の教授として活躍しました。とくに、1888年（明治21年）より発行された「動物学雑誌」は、当時は唯一の発表の場でした。また、飯島の教え子には、内田清之助、黒田長禮（ながみち）、鷹司信輔と、その後の日本の鳥類学を支えた研究者が傑出しています。

明治時代、黎明期の日本の鳥類学は、剥製のコレクション、そしてそれに基づく分類学の確立でした。すでに本土の鳥は、外国人によって名前が付けられてしまったので、沖縄や小笠原、あるいは占領地へと採集人を派遣して、集められた剥製を整理し新種の発見や新亜種の記載を行ったのです。この辺は、シーボルトが日本で集めた標本をオランダに送り、オランダでテンミンクとシュレーゲルが整理し発表していったこととかわりはありません。そして、彼らの活動は、シーボルトの影響を強く受けた科学的な鳥とのつき合い方で、客観的で剥製という物証に基づくものだったのです。

その後、1912年（大正1年）に日本鳥学会が発足し、日本の鳥類学が本格的に活動をはじめます。このときの中心的なメンバーは、前出の飯島の教え子たちに加え、山階芳麿、清棲幸保などが加わり、競って剥製のコレクションと新種、新亜種の発見を

行い日本の鳥類学研究の黄金時代を迎えます。このあたりのことは、科学朝日編「殿様生物学の系譜」(1991年・朝日新聞社)で、当時の片鱗を伺い知ることができます。

日本野鳥の会の発足

日本の野鳥史の次のエポックは、やはり日本野鳥の会の創立でしょう。1934年(昭和9年)のことです。当時もさかんだった野鳥を籠で飼うことに反対して「野の鳥は野で」と「科学と芸術の交流に野鳥を置く」と2つの主張のもとに探鳥会の実施、雑誌「野鳥」の発行を中心に活動をはじめました。

イギリスのRSPBは婦人の装飾用に飾り羽を用いることが流行したのに反対して1889年に創立。アメリカのオージュボン協会も飾り羽と標本や卵のコレクションに反対、これに加え野鳥の第一次産業への経済的な貢献をうたって1905年に全米単位の組織となりました(1886年以来、各地に協会があった)。

日本野鳥の会の創立は、欧米に遅れること数十年の月日がありますが、装飾用、コレクション、そして飼育と、時代の風潮へのアンチテーゼがきっかけであることに加え、野鳥を文化としてとらえ普及していこうと言う欧米のバードウォッチング団体にはない考え方がありました。

野外識別の誕生

第1回の探鳥会が富士山麓の須走で開催されたことは、ご存じの通り。この会に参加した北原白秋などの文化人は、野鳥の名前のわかる悟堂の能力に感嘆し、バードウォッチングの素晴らしさを満喫し、当時の文芸雑誌や機関誌の「野鳥」に寄稿しました。このように、当時の歌壇、画壇、文壇の重鎮が日本野鳥の会と関わったのは、もっと野鳥を知り、そのことにより己の作品をより良いものにしたという芸術家の強い願望があったからです。

そして、それまでの鳥の名前の調べ方は、剥製を手にして乾燥しても変化のない嘴、足の長さの他、翼長、尾長などを計って、種類を特定するものでした。それが、野外で飛んでいったり声だけで名前がわかるというのは、たいへん驚異だったわけです。

しかし、これはもうおわかりのように追試できない主観的なもので、科学的ではないという懸念があります。振り子が、片方に振るともう一つの意見が出てきます。この野外における識別を科学的にでき

ないかと考えたのが榎本佳樹です。

榎本は、日本野鳥の会大阪支部を中心に活動した職業軍人で、学者ではありません。しかし、野外で鳥の名前を識別するための方法を科学的に確立させようとした功績は大きなものがあります。それまで剥製による種の特定は「同定」、これに対し「識別」という言葉を使ったのもおそらく榎本、さらに鳥類図鑑には欠かせない「全長」を提唱したのも榎本なのです。この全長がはじめて書かれたのが「野鳥便覧 上・下」(1938、1941年・日本野鳥の会大阪支部)の下巻の一覧表です。以後、多くの図鑑がこの数字を引用しています。

当然、科学的なバードウォッチング発祥の地、イギリスでも野外識別の技術が発達し、ピータソンが“A FIELD GUIDE TO THE BIRDS OF BRITAIN AND EUROPE”を1954年に発行しました。野外で野鳥の名前がわかるような絵と解説のある今までにない図鑑の登場だったのです。

若手として当時、指導的立場にあった高野伸二さんはこれらの影響を受けて「野外観察用鳥類図鑑 正・続」(1965-1966年、日本鳥類保護連盟)、そして「フィールドガイド日本の野鳥」(1982年・日本野鳥の会)と、日本の野鳥を野外で識別できる図鑑を著し、野外における識別の方法をより確かなものにさせていったのです。それと同時に、野鳥観察、探鳥と言われていたものが「バードウォッチング」とカタカナになり、イギリスで発祥した優雅な趣味として取り上げられるようになったのです。

ですから私たちが野外で野鳥の名前を言い当てる方法は、実は戦前に提唱され、1960年代に確立され、この流れの中に私たちはいるのです。

これからのバードウォッチング

日本野鳥の会が1971年に財団法人化され、事務局をかまえ活動を始めました。活動のひとつとして環境庁の委託調査で北海道や離島の鳥の実態を把握するために「特殊鳥類調査」を行いました。このとき、日本野鳥の会に調査ができるかという批判が鳥の仲間の中にあつたのです。「趣味団体の日本野鳥の会には科学的な調査をすることができない」というのが、論拠の元になっていました。

今思えば何をいっているのだと思いますが、今でも探鳥会や横でバードウォッチングしている人を見ていると、明らかに野鳥の名前を間違えていることがあります。たとえば、珍鳥大好きなバード

ウォッチャーが「大きな鳥がいる。ハヤブサかもしれない！」と叫んでいます。私の位置からは見えないうので困っていると「それも、シロハヤブサかもしれない。」といます。たまたま他のバードウォッチャーが「なんだカラスじゃないか」といい、私もやっとその鳥の見える位置まで移動してカラスであることを確認しました。

もし、誰も確認できなければカラスが珍鳥のシロハヤブサになってしまうところでした。また、なぜシロハヤブサの名前が出てきたかといいますと、このしばらく前にシロハヤブサを見たいという話を皆でしていたからです。それが先入観念となって、珍鳥の出現となってしまったのです。

ここまでお話してきて理解していただけたと思いますが、実は今バードウォッチングは科学的な鳥類学と趣味のバードウォッチングが曖昧になっているのです。

現在のように環境問題が深刻になり、鳥の持つウェイトも大きくなった時代、バードウォッチャーの責任も大きくなりました。たとえば1人のバードウォッチャーがトビをイヌワシと見誤り、イヌワシを見たと思って大喜びして、その日の晩酌のビールが旨い！程度ならば実害はありません。しかし、イヌワシがいたことにより開発をストップさせなくてはならない時代になったのです。イヌワシがいなくても、ストップさせることはある意味で良いのですが、これが誤りであることが後でわかったらどうでしょう。鳥関係者は信用を失い各地で開発が促進されてしまうことだって考えられます。今やバードウォッチャーの記録と見識が社会的な責任を持つ時代になったのです。

この反面、日本人は花鳥風月の中で、自然と鳥に親しんできました。日本にあったバードウォッチングは、感情や感性にうったえる心安らかなバードウォッチングであるかもしれません。これだけ話題になり、面白く奥深いバードウォッチングが、俳句と比べいまいち普及しないのはなぜでしょう。これは、バードウォッチングは専門的な知識のいるもの、マニアのものという印象を一般に与えている事実も否めません。普及をはかり支援者を増やすのならば、日本人のための日本人に合ったバードウォッチングの提案をしていくべきでしょう。風流で粋なバードウォッチングの普及ができたならもっとバードウォッチャーが増えるかもしれないと思ってしまうのです。

もう一つの結論

今まで述べたことで、客観と主観がまるで水と油のように相反するもののように伝わったのであれば、訂正したいと思います。客観と主観は、実は車輪の両輪のように密接に関係しています。

たとえば、前出の尾形光琳は精密でリアルな鳥のスケッチをたくさん残しています。おなじように抽象画の巨匠のピカソも写実的なスケッチを描いています。そして、そのスケッチを元にあの抽象画を書き上げたのです。絵を描くには、抽象画にしる写実画にしる、よく観察する、客観視することが基本なのです。また、日本野鳥の会の創立当時、歌壇、画壇、文壇の重鎮が日本野鳥の会に関わったのは、己の作品をより良いものにするために、野鳥を知ろうとしたためです。

万葉集の詩歌から江戸川柳にしても扱われた鳥の表現から、当時の鳥や自然の様子を推し量ることができるのは、彼らがしっかりと自然観察、客観視しているからに他なりません。主観を重んじる芸術であってもその根元は客観にあるわけです。

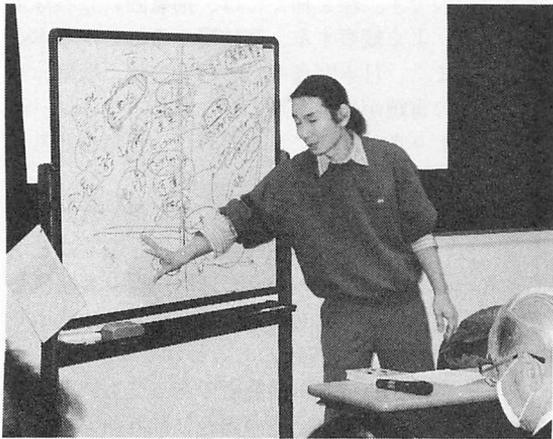
逆に、客観を重視する研究者であっても、なぜその鳥を選んだのか、なぜその課題に取り組んでいるのかの多くは個人の好みによって選択されているわけで、研究のきっかけは主観によるものが多いのです。そして、フィールドで蒐集されるデータにしても個人が見る、あるいは判断することは主観によるしかありません。まして、仮説をもとに立証しようとするような研究では、主観がどうしても入ってしまい、これを排除することはたいへん難しく研究者の悩みでもあります。

主観と客観、実は背中合わせの関係なのです。ですからバードウォッチングを主観と客観と明確に分けることはできないかもしれません。

いずれにしても結論じみたことを申し上げますと、野鳥業界において指導的立場にある方々は少なくとも今自分のバードウォッチングが主観または客観を主体としたものか、認識を持って活動していただきたと思います。また、自分のバードウォッチングが日本の野鳥史の流れの中で、どこにいるのか認識してほしいと思います。たとえば、一口にバードウォッチングといっても、今までの話のとおり、山階、黒田の路線は鳥類学、中西は野鳥道、そして高野はバードウォッチング学ともいえる微妙な違いがあります。自分がどの路線なのか知っておくことが

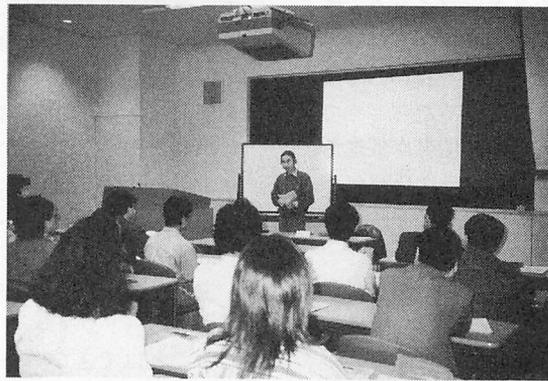
肝要でしょう。なぜならば、それは今野鳥たちのために自分が何をすべきなのかを自ら知るために必要なことだからです。そうでもないと、自分の好きなことや日常の仕事に流れされたり、マスコミ先行でものごとが進んだりしてしまうからです。これから21世紀に向けての野鳥の保護とのためのバードウォッチングの普及を考えるならば、しっかりした足がかりが必要だと思えます。その足がかりのひとつになることではないでしょうか。

(1998年11月13日)



■参考文献

- 黒田長禮 1927 日本鳥学発達史 自然科学Vol.2, No.2:20-57 改造社
塚本洋三 1977 バード・ウォッチングの歴史と背景 月刊百科 No.181:4-7 平凡社
日本野鳥の会 1978 中西悟堂会長業績 日本野鳥の会
奥田夏子、他 1982 野鳥と文学 大修館書店
中村禎里 1984 日本人の動物観—変身譚の歴史 海鳴社
柴田敏隆 1984 私の愛鳥講座 東京書籍
科学朝日 1991 殿様生物学の系譜 朝日新聞社
小野佐和子 1992 江戸の花見 築地書館
松田道生 1994 野鳥をよむ アテネ書房
松岡正剛 1994 花鳥風月の科学 淡交社



後援行事報告

多摩川、野川での 「トラスト バードウォッチング」

事務局 箕輪 多津男

平成10年12月12日（土）に、(財)せたがやトラスト協会主催で、全国愛鳥教育研究会も後援として参加しております「トラスト バードウォッチング」（入門編）が開催されました。

このバードウォッチングは、1992年に始まって以来、本年度で既に7回目を迎え、恒例行事としてしっかり定着した感があります。

当日は晴れて、例年のない穏やかな天候で、絶好の観察日和となりました。

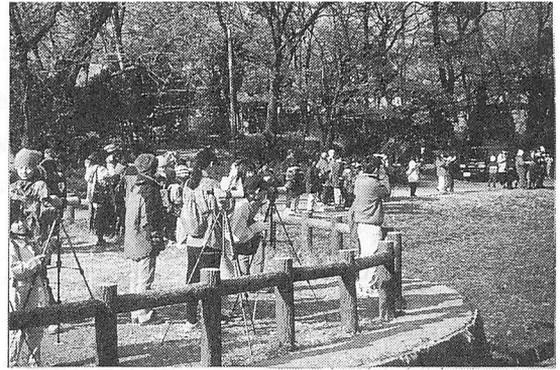
参加者は250名～300名と、過去の数字に比べるとやや少なめだったようですが、大半が初心者ということもあり、マガモやゴイサギ、カワセミなど、色彩の鮮やかな鳥を見付けると、こちらがあっけにとられるぐらい感激していたようでした。

そうした感激を胸に、特に参加していただいた多くの児童の皆さんが、野鳥をはじめとする野生生物や自然環境に関心を持ち続け、将来の地球環境保全

の担い手になってくれれば……などと、ささやかな希望を抱きながらも、実に楽しいひとときを過ごすことができたように思います。

この「トラスト バードウォッチング」は、観察のためのリーダーが、多摩川と野川の岸の5ヵ所のポイントで待機し、参加者のほうがそれぞれのポイントを巡りながら観察に参加していくという方式で、従来のものとは異なり、数百人規模以上の多人数の参加を可能とするものです。そういった意味からも、こうした観察会は大変意義あるものとして、今後も末長く継続されることを切に期待しております。

最後に、このイベントの企画・運営を担当しておられる荒井千鶴さんをはじめ、(財)せたがやトラスト協会の職員の方々、あるいは普段から事業に参加しておられる多くのボランティアスタッフの皆様、大変ご苦労さまでした。改めて感謝申し上げます。





トラスト バードウォッチング [入門編]

ミニ野鳥図鑑(KEY BIRD50・秋冬編)を使ってバードウォッチング!

せたがやトラスト協会の《トラストバードウォッチング》は、今年も12月の第2土曜日に二子玉川の兵庫島河川公園で行います。

冬鳥たちが多く見られる最高のシーズンに、だれでも参加できる最もやさしいバードウォッチングを行います。どなたでも、お友達をさそいあつて気軽に参加してください。

次の内容と申し込み方法をよく読んで応募してください。お待ちしております。

- ◆ 日 時 平成10年12月12日(第2土曜日)
午前9時15分~11時30分(受付は9時~)
- ◆ 場 所 兵庫島河川公園(集合場所は「兵庫橋」です)
(東急新玉川線[二子玉川園駅]より徒歩3分)

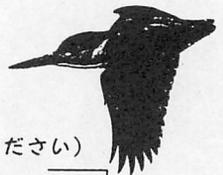
※9時15分までに、兵庫橋に直接集まってください



- ◆ 持ち物 筆記用具と雨具。(双眼鏡・望遠鏡がある人は持ってきて下さい)
持っている人は「ミニ野鳥図鑑(KEY BIRD50・秋冬編)」も。
- ◆ 服装 冬の河原は風が強く大変寒いです。毛糸の帽子や手袋などであたたかくし、はきものは歩きやすいものがよいでしょう。
- ◆ 参加費 無料です
- ◆ 雨天の場合 中止 ※なお、当日天候により判断のつかない場合は、

せたがやトラスト協会 ☎3789-6112へ午前8時~8時半までにお問い合わせください。

- ◆ 注意 子どもたちどうしの場合は、家族の人に
「いつ・どこで・だれと」を必ず言ってから参加しましょう。



[申し込み方法] (傷害保険加入の為、次の項目①~④をお書きください)

(ハガキで)

- ①「トラストバードウォッチング」参加希望と書いてください
- ② 名前(家族や友達も参加する場合は全員の名前と人数)
- ③ (団体やグループの場合)代表者の住所と氏名、年齢、電話番号
- ④ 学校での参加の場合は学校名と学年もお願いします

12月10日(木)必着!

☎157-0066 世田谷区成城6-2-1 (財) せたがやトラスト協会

「トラストバードウォッチング」係まで お申し込みください。



主催：(財) せたがやトラスト協会

後援：(財) 日本鳥類保護連盟

全国愛鳥教育研究会



(ご案内)

<全国愛鳥教育研究会 主催>

小学校の先生のための 『野鳥をはじめとする自然観察指導法・冬期研修会 in多摩川』

全国愛鳥教育研究会では、標記の通り小学校の先生を対象とする自然観察指導法研修会を企画いたしました。

特に今回は4年生理科の「季節と生き物」をテーマとし、冬期ならではのカモ類を中心に、水辺に生息するさまざまな生き物の観察法について、実践を踏まえながら、ともに考えていただこうと思います。

また、これまでほとんど野鳥や生き物の観察会等には縁がなかったという、言わば初心者の方でも大歓迎ですので、どうぞお気軽にお申し込みください。

ただし、参加人数につきましては10名といたしますので、お早めにお申し込みください。

記

- | | | |
|---------|----------------------|---|
| 1. 日時 | 平成11年1月31日(日) | 9:30~12:00 |
| 2. 集合場所 | 京王線 聖蹟桜ヶ丘駅・八王子寄り改札口前 | |
| 3. 参加費 | 500円 | (※当日会場にてお支払いください。) |
| 4. 対象者 | 小学校教師の方(10名) | |
| 5. 持ち物 | 筆記用具、双眼鏡(持50方)等 | |
| 6. 日程 | 9:30 | 集 合 |
| | 9:35~ 9:45 | 多摩川岸に移動 |
| | 9:45~12:00 | 自然観察指導法研修
・カモ類等の観察について
・水辺の自然の様子
・意見交換 |
| | | 他 |
| | 12:00 | 解 散 |

◆参加申し込み方法◆

下記事務局まで、はがき、電話、またはFAXにてお申し込みください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿2-5-5 新宿土地建物第11ビル5F

(財)日本鳥類保護連盟内

全国愛鳥教育研究会・事務局

担当：箕輪(あゆ) 多津男

TEL. 03-3225-3590 FAX. 03-3225-3593

同じ名を持つ生き物たち

自然観察指導員 森 真 希

●生き物の名前の面白さ

人類が認識しているものには全て名前がつけられているという。もちろん野生生物もそうである。しかし、生き物の世界では人にその存在を知られず名前もつけられていないものが星の数ほどだとか。

現在地球上に確認されている生物は150~200万種と言われている。そして、その10~100倍の生き物が地球で生活していると推察されている。

名前がつけられているというのは、学名が与えられていることを意味する。学名には、全世界共通の約束で死語となったラテン語が使われている。ところが一般の方にとっては、日常的に馴染みの薄い学名よりも、その国の、その土地の、その文化の中で呼ばれている名のほうが、飲み込みやすいのではあるまいか。

図鑑などを見てみると「学名」「和名」「別名」「英名」等々、その生き物の表現の仕方が色々と紹介されている。生き物の名前には様々なアプローチの方法があると思われるが、ここでは全く別の生き物なのに同じ和名を持っているという仲間たちをいくつか紹介したいと思う。

●コミミズク

野鳥に興味を持つ方は、すぐにフクロウ目の仲間である「コミミズク」を思い起こすであろう。私が同じ名を持つその生き物を知ったのは大学の友人たちと地元の自然観察をしていた時だった。虫のことも良く知っている人が、ジョロウグモの巣を見てこんなことを言った。

「ここにコミミズクがひっかかっているよ」。

仲間たちは何かの単語を聞き間違えたのかなという反応をした。あのフクロウのコミミズクがクモの巣なんかにかかっているわけがない。誰もがそう思ったが、その人は続けた。

「ほら、糸にまかれて分かりにくいけどコミミズクだよ」。

覗いて見るとそこには体長数十mmの物体が糸にからまっていた。この生き物、セミの遠い親戚で、同じ類に「ミミズク」というのもいる。同じ名前を持

つ生き物に衝撃を受けた出来事であった。

●ヤツガシラ

バードウォッチャーにとっては憧れの野鳥の一つ「ヤツガシラ」。私はこの鳥の存在を知る前に、他の意味で「ヤツガシラ」という言葉を知っていた。高校の家庭科の授業でお節料理の話題が出た時に先生が教えてくれた食材が「八つ頭」であった。サトイモの一種で親芋用の品種らしい。名前が末広がり縁起の良いことから、お節料理や引出物の折り詰めに入れたりするという。印象に残る名前だったので、物覚えの悪い私でもしばらく記憶していた。

その名前を再び耳にしたのは沖縄の西表島。予習も何もしなかったのに、どんな生き物がその島にいるのか殆ど無知のまま島に入った。宿のおじさんのガイドで島のバスツアーに参加。しばらく林縁の車道を走っていると、運転手を兼ねたガイドのおじさんが大声で

「ヤツガシラが走っているぞ！」

と叫んだ。私はその時、巨大な里芋の八つ頭が道路を転がっているのを連想してしまった。あまりにも恥ずかしい思い出であった。

●クロサギ

コウノトリ目サギ科の海岸を好む留鳥。この名前の生き物が他にもいることを魚類調査で初めて知ることが出来た。釣りを趣味にしている方や淡水魚が好きな方は聞いたことのある生き物かも知れない。

ある調査中に淡水魚図鑑をめくっていて目に入ってきたその同じ名前に驚いた。正体はスズキ目クロサギ科クロサギ属クロサギ、南日本に分布し全長25cmの地味な魚である。成魚は沿岸の浅いところにも生息し、なかでも内湾に多いという。野鳥のクロサギとも生活場所が近いので、クロサギを食べるクロサギなんていうこともあるかもしれない。

●アカザ

こちらは植物の名前のほうが一般的であろう。ほうれん草と同じ仲間のアカザ科アカザ属の草本。シロザの変種で若葉の時、紅紫色の粉状物質におおわれて、その鮮やかさは目にとまる。

アカザの名を持つもう一つの生き物は、きれいな川を好む日本固有種の魚である。日本では1属1種で、本州から四国、九州に広く分布する。

この生き物との出会いは、会社の同僚たちとカジカガエルの写真を撮りにいこうと夜中に川へ遊びに行った時の事である。石をひっくり返して魚を探していたある男性が、突然「痛い！」と声をあげた。彼に痛みを与えた犯人を捕獲したところ、体長数cmのアカザであった。彼はアカザのヒレの棘を触ったらしい。

山口県ではアカナマズとも呼ばれているらしいが、確かに赤いナマズに見える。きれいな河川の中流から上流を好むため、彼等の生息環境が気になる場所である。

●ヤマトシジミ

これは両方知っている方が比較的多い名前ではないだろうか。まずは食材から。お味噌汁の具でもよく使われるシジミは殆どがヤマトシジミである。他にもセタシジミやマシジミなどがある。コハク酸を多く含み汁物にするとうま味が良く出る。産地は島根県の穴道湖が有名だ。

そして同じ名前の昆虫、シジミチョウ科ヤマトシジミ。このチョウの雄の翅と貝のシジミの内面が淡紫色という共通項がある。岩手県を北限として全国各地に生息する。食草のカタバミさえあれば緑地の少ない都会の道端でも繁殖する。小さなチョウの姿に思わず彼等の逞しさを感じてしまうものである。

●ハス

これも植物の方が有名かもしれない。スイレン科ハス属、この植物の根茎が野菜のレンコンであることを意外と今の世代の若い人達は知らないらしい。この花は咲いて閉じてを3日繰り返して、4日目に花弁が散る。夏、沼一面にピンクの大きなハスの花が咲いているのはなかなかの壮観である。

この花と同じ名を持つ魚がいる。コイ科ハス属、日本産コイ科の中では唯一の肉食性である。全長30cmまで大きくなる。魚類調査で初めてつかまえた時、その口の形に驚いた。図鑑には「くへ」の字形

をした口器と記しているが、本当に「くへ」という感じの口なのである。琵琶湖淀川水系と福井県三方湖に自然分布するが、琵琶湖産稚アユの放流とともに各地へ広がっている。

同じようにもともと琵琶湖特産であった淡水魚がアユの放流のために全国に分布するようになった例は多数あるという。生き物の分布に与える人間活動の影響は想像以上に大きいかもしれない。

●その他

- ・ゴンズイ (魚&木)
- ・オヒョウ (魚&木)
- ・カマツカ (魚&木)
- ・ヒイラギ (魚&木)
- ・コムラサキ (蝶&木)

●興味ときっかけ作りのアプローチ

ここに取り上げたのはほんの一部であるが、おそらく探せばまだまだ出てきそうである。自然観察会では、生き物の名前を知らない人にも自然の楽しさを伝える手法が沢山あるが、生き物の名前を知ることから学んでいくのは基本的な手法の一つと言ってよいのではないだろうか。

今回は、同じ和名を切り口に生き物を紹介してみたが、生き物や食べ物といったことにまで範囲を広げ、なぜそのように呼ばれているのか、由来からその背景にある人の文化まで調べていくと、きっと様々なものが見えてくるのではないだろうか。

生き物に対する興味のきっかけづくりに、名前の面白さという窓口が一つ増えれば、限りない話題がその人に提供されるだろう。

他にも同じ名前の生き物がありますという情報をお持ちの方は是非ご一報下さい。

環境学習教材「やちょうぬりえ」のご案内

常務理事 小野紀之

この度、野鳥シート（これまでに2種制作）に続く環境学習教材として、当会監修により、「身近な野鳥たち（やちょうぬりえ）」を制作しました。

この教材は、小さな子どもから大人までより幅広い年齢層の方たちが野鳥観察をする際に「よく見る」ことの大切さを体験していただくためのものです。

とかく全体ばかりに気をとられ、その細部をよく見ることがないために、どこを見て、観察、識別したらよいかわからないということがよくあります。ところが、あえて色のない絵を見ながら観察することによって、細かい部分の色、模様に関心が向くも

のです。

また、小さな子どもたちには、自然（野鳥）に関心をもたせるきっかけ作りとして、ぬりえという遊びから導入してみるのはいかがでしょうか。

それぞれの場で、「よく見る」「創造する」をテーマに、ご活用いただければと思います。

なお、ご注文は下記の通り受け付けていますので、お問い合わせください。

身近な野鳥たち
(やちょうぬりえ)

イラスト	林 戸 幸 孝
監 修	全国愛鳥教育研究会
全 冊 作	エコ・フレインズ・システム
製 作	プランニングオフィス 01991
	TEL & FAX 03-5753-6484

記

教材名： やちょうぬりえ（7枚1セット）

単 価： 100円（税込み）

注）ご注文は必ず100セット以上でお願いいたします。

会員に限り送料サービス

お問い合わせ・ご注文は、

〒146-0085

東京都大田区久が原3-14-22

プランニングオフィス ひるぎ 小野 宛

FAX 03-3753-6484

e-mail: hirugi@mb.infoweb.ne.jp

ご注文はハガキ、FAX、またはe-mail でお願いたします。

身近な野鳥たち

●スズメ

家のまわりなどでふつうに見られる鳥で、ほお、のど、目の先の部分が黒い。

●シジュウカラ

のどからおなかにかけて黒いネクタイをしたようなもようが特徴。 「ツツピー、ツツピー」とくりかえしてさえずる。

●メジロ

みどり色の体と、目のまわりの白いわが目立つ。大きさはスズメより小さい。

●ツバメ

ひたいのどは赤色。家ののきしたなどに巣をつくり、子育てをする。夏鳥。

●キジバト

背とつばさにうるこもようがある。首の部分の青と白のもようが目立つ。「デッポッピー」とくりかえしてなく。

●カルガモ

くちばしの先の黄色と、オレンジ色の足が目立つ。夏、ヒナをつれた親子がまちなかの池や小川でも見られる。

●カワウ

くいの上や川原で、つばさを広げてかわかしているすがたがよく見られる。

〈 保 護 者、指 導 者 の み な さ ま へ 〉

この〔 やちょうぬりえ 身近な野鳥たち 〕は、身近な自然や生活環境に関心をもってもらうことと、よく“見る”ことの楽しさをしてもらうきっかけづくりを目的に企画・制作されました。子どもといっしょになって、身近な野鳥をじっくりと観察しながら、ぬりえを完成させてみてください。また、直接野鳥を観察できない場所などでぬりえを行なう場合は、図鑑などを見てぬらせるよりは、子どもの創造力を育む目的で、自由にぬらせてあげてください。

※イラストなどの一部または全部の複製、無断転載を禁じます。

※この(やちょうぬりえ)は、再生紙を使用しています。



ぬりえ用紙



※環境省の認定を受けた再生紙を使用しています。

論 説

給餌活動と愛鳥教育

常務理事 平 田 寛 重

野鳥は、本来、人為的な給餌に頼らず自ら餌を探して生きている。餌が無くなれば、餌を求めてそこから離れていく。しかし、人為的な給餌によって労せずして餌を得ることができれば、それを当てにすることもやる。従って、給餌には、人間の都合で餌によって野鳥を居着かせるという面がある。もっとも、野鳥は人間そのものをあてにしているわけではなく、その餌を適当に利用していると言ったほうが適切であろう。

例えば、レンジャク類の場合、自然状態では、越冬場所を点々と移動し、キツタやヤドリギなどの木の実を見つければ、食べ尽くすまでそこにいることが多く、無くなってしまえば、次の餌場を求めてどこかに行ってしまう。しかし、人家でリングなどでまめに給餌をすると、春先の移動までの間は、居着いてくれるのである。

また、雪国などでは、本来その環境でも餌を採り、越冬できる種がそこに逗留するのであり、そのキャパシティにあった数が居着くのである。北海道のタンチョウのように、保護政策の結果、個体数が生息環境の許容量をはるかに越えてしまったような場合、人為的に餌を供給しないと餓死してしまう状況が出てきてしまう。このような給餌活動は、愛鳥教育で考える給餌活動とは少し異なる。

給餌活動は、愛鳥教育においては「まもる活動」として取り組まれる場合がほとんどかと思われる。自然環境に餌の少ない冬の時期、特に積雪が多く、餌になるべきものがすべて覆い隠されてしまうような地方では、まさに鳥をまもるための活動といえるであろう。

しかし、その環境が養える個体数にも限りがあることは、そこで暮らしている鳥にもわかることである。自分の食べる餌がないと判断すれば、もう少し状況のよい暖地へ移動して餌を求めていく。特に若い個体では、そのような傾向が強いと思われる。

このような状況の中で、鳥のためとは言いながら安易に餌を与えてしまうことは、その環境での鳥の許容量を増やすことにつながり、その餌によって増

えてしまった個体群のためにシーズンになると永遠に餌を与え続けなければならない状況になってしまう恐れがある。もし餌を与えることを途中で放棄すれば、当然のことながらそれを当て込んだ鳥に影響が及ぶことになる。こうなると、鳥のためという考えに基づく給餌活動も、鳥に対する人間の大きなお世話であり身勝手な行動であるということにもなる。給餌活動というものについては慎重な取り組みが求められるものなのである。

従って、まもるという意識で活動する場合には、周囲の状況を判断してしっかりとしたビジョンを持って取り組んでいただきたい。それがないままの活動であれば、鳥をはじめとする野生動物に餌をやっても何の問題もないと考える無分別な人間を育ててしまいかねないのである。

では、愛鳥教育においては、給餌活動に対してどのように取り組んでいったらよいのであろうか。

本会では、水場や食餌木（実のなる木）もそうであるが、給餌活動を身近な場所に鳥を呼ぶ装置の一環として位置づけている。餌を置き、鳥たちに寄ってきてもらうことで、鳥と関わりを持つための場とするのである。そうすることで、双眼鏡を使わずに観察できる近さまで鳥たちが来てくれるので、大きさや形、色や模様などの形態や採餌や手入れ、コミュニケーションなどの生態などについて学習することができる。

例えば、教室のベランダの餌台に来る鳥を窓越しに見るだけでも、子どもたちにはかなりのインパクトを受ける。ふだん野鳥を近くで見る機会があまりなく、習慣もないような場合は、このような場を設定することにより、野鳥への関心を高め、理解を深め、適切な関わり方を学んでいく機会となる。

もちろん、双眼鏡等の器具を使ったフィールドでの観察は当然行うことではあるが、給餌台に集まる鳥の観察にはフィールドでは難しいことを可能にする面があるので、鳥との関わり方についての学習プログラムに加えておくとよい。

つまり、愛鳥教育においては、給餌活動は、学習

の場として設定して取り組むことに意味がある。単に餌を蒔いて自己満足するような趣味的なものとは目的が異なる。

学校教育でも、近くのフィールドに来るガンカモ類に餌をやり、野鳥とのふれあいを深めるといった学習プログラムがあるが、野生動物とのつきあい方や餌による河川等の汚染といった問題も併発する恐れがあるので慎重な対応が望まれる。ただの思いつきで始めてはみたものの、後々になって困ることがないようにしておきたいものである。

以上述べてきたように、野鳥に給餌する行為よりも、間近に見ることのできる野鳥とのふれあいを楽しみながら野鳥を理解していくことが重要である。繰り返しになるが、過度に餌を与えたり、通年行ったり、手乗りにしてペットのように扱ったりといったことがないように、野生を尊重して一線を引くように心がけることが肝要である。教育活動としてフィールドで給餌活動を行う場合には、人間の側の自己満足に陥らないように慎重に取り組む必要がある。

編集後記

遅くなりましたが、56号をお届けします。

今年度は、新しい企画として講演会を開催しました。本会顧問をお願いしている松田道生氏に講師をお願いしました。

氏は、バードウォッチングの普及とその解説にかけては第一人者といってよい方ですが、長らく温め続けてこられたテーマがあるとお話をうかがい、それについてお話くださるようお願いしたところ、今回の「主観と客観のバードウォッチング」というユニークなタイトルとなりました。

講演後、事務局でその要旨をとりまとめるつもりでしたが、氏のご厚意で自ら原稿としてとりまとめてくださいました。それが、今回掲載しているものです。

バードウォッチングは、愛鳥教育の原点ともいえるべきものですが、その意味合いについて新たな問題提起と再確認の必要性を説かれたものとして、大変興味深いものだと思います。どうぞお読みく

ださい。

なお、今後、この企画をシリーズとして継続していく案を持っておりますが、会員の皆様のご意見ご希望などをお寄せいただければ幸いです。

冬期研修会も、小学校の理科で指導することを念頭に置いた内容を中心に新たに企画したものです。東京近県の会員の皆様と愛鳥モデル校に案内状を送付した上で実施しました。

これについては、次号で報告する予定です。

このようにいろいろな企画を進めてきておりますが、これは更に進めていく予定です。皆様のご意見ご希望をお待ちしております。

(染谷)

愛鳥教育 No.56

平成11(1999)年3月31日

発行人	江袋島吉
発行所	全国愛鳥教育研究会
住所	〒160-0022 東京都新宿区新宿2-5-5 新宿土地建物第11ビル5F (財)日本鳥類保護連盟内
電話	03-3225-3590
FAX	03-3225-3593
会費	3,000円
郵便振替	00180-7-12442
印刷所	祐文社

愛鳥クイズ (20)

常務理事 平田 寛重

【前回55号の問題と解答】

1. ちどり足ってどんな足？

酔っぱらいがあっちに行ったりこっちに来たりする歩き方を、なぜ「ちどり足」と言うのでしょうか。

チドリ類は、目で餌を探して餌に近づきます。しかし、直接餌には向かわず、わざとあっちにいたりこっちにいたりして関係無いようなそぶりを見せ、相手が油断しているすきに捕らえるということをします。

酔っぱらいがジグザグに歩いている様子を、歩き方がチドリの歩き方と似ているということからこのような名前がつけました。

2. ホウロクシギとダイシャクシギのちがいは？（腰がポイント）

ダイシャクシギは腰が白い。ホウロクシギは白くない。

伸びをしたり飛んだりすると、はっきりと識別することができます。腹から尾にかけても白いのですが、これはわかりにくいかもしれません。

3. ダイゼンのわきの下の色は？（似ているムナグロとの大きな違い）

ダイゼンの脇の下は黒い。ムナグロは黒くない。

これも、伸びをしたり飛んだりすると、よくわかります。

4. コチドリとシロチドリの違いは？（首輪模様がポイント）

コチドリは首輪が一周回っている。シロチドリは胸の所で首輪が切れている。

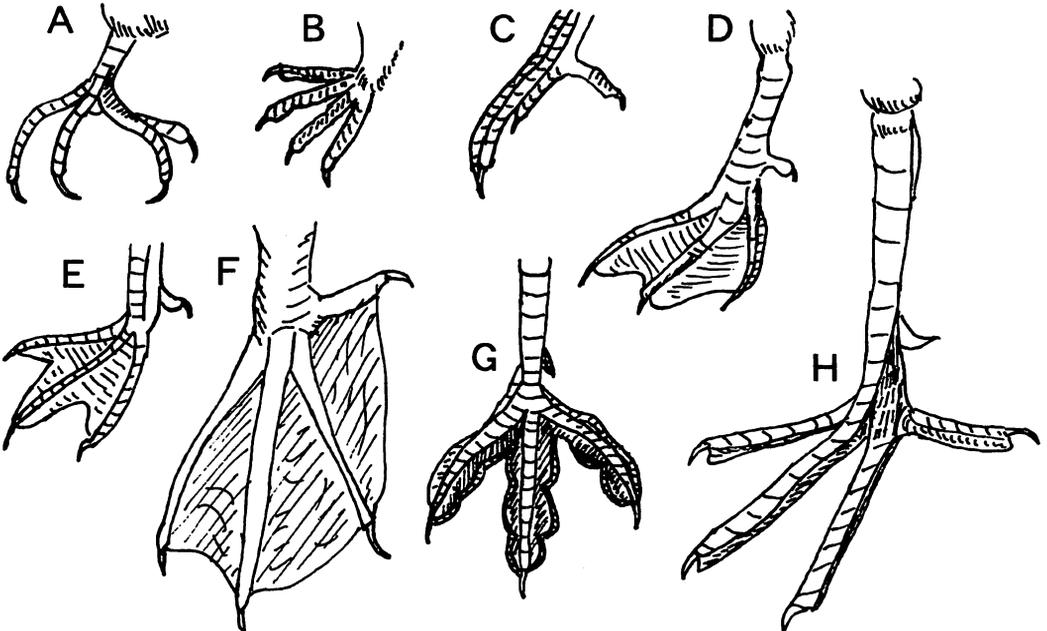
5. シロチドリとメダイチドリの違いは？（えりの部分がポイント）

シロチドリは首の後ろが白いが、メダイチドリは白くない。

【今回56号の問題】

今回は、野鳥の脚の形を調べてみましょう。脚のイラストと鳥の名前を合わせてください。

①カワウ ②マガモ ③オオバン ④キジ ⑤カワセミ ⑥コゲラ ⑦アマツバメ ⑧アジサシ



《参考資料》黒田長久著「動物系統分類学10（上）脊椎動物（Ⅲ）」

